

授業で辞書を開いてみよう～自立した学習者を育てるために**Crown English Communication II 辞書引きガイド**

東京理科大学・明治大学講師、『ウィズダム英和辞典』編集委員
吉村 由佳

『ウィズダム英和辞典』の編集委員で、付属教材のワークブックの編者である吉村由佳先生は、勤務校における一般教養の英語の授業でも、学生に辞書を持ってくるよう義務付けています。授業中にも、様々な場面で学生に辞書を実際に引かせ、辞書引きのトレーニングを織り交ぜた教育を行っています。今回、高等学校の英語教科書（Crown English Communication I）を用いて、高等学校における授業の場面で、実際にどのようなところを生徒に見せて、辞書指導をしてゆけばよいのかを、紙面で再現していただきました。先生方の日常の授業において、お役立ていただけましたらさいわいです。（『ウィズダム英和辞典』編集部）

私は授業で使うテキストの随所にアンダーラインを引いて、授業準備をしています。このアンダーラインは、「この箇所では授業中に辞書を引かせて、学生に…のを確認させよう」という印です。

確認させたい内容は、いろいろあります。文型を把握してほしいところ、コロケーションを調べて定着させたいところ、YXなどの「約束事」を確かめさせたいところ…。とにかく、辞書は情報の宝庫です。

たくさんアンダーラインを引いて「仕込み」を行っても、時間には限りがありますし、授業で実際に学生に辞書を引かせることができるのは、よくて数か所です。でも、私はそれでもかまわないと思っています。気になった箇所にアンダーラインを引いて、そこを辞書でチェックすることは、指導する側にとってもいい授業準備になるので、無駄にはなりません。

学習者に辞書を引かせ、確認させることは、大いに意義のあることだと私は考えています。その「効能」をふたつほど挙げてみたいと思います。

- ①辞書に様々な情報が入っているということを実感させること：大学入試を経て入学した大学生であっても、辞書にある情報を正しく、そして十分に読み取れている学生はごくわずかです。どんな発見でも、「この本を開いて、適切なおとところをちゃんと調べれば、私に必要な情報を与えてくれる」と実感させることは、自分から学習しようという大きな動機づけになります。
- ②的確に情報を読み取るための、辞書の約束事を知らせること：YXなどの可算・不可算情報は、英文読解だけでなく英語発信活動の際には不可欠な情報です。そのほかにも辞書には使用域などのレーベル、文型表示や用法指示、参照指示などについて、その辞書独自の約束事や、英和辞書一般について共通している約束事があります。同じページの同じ部分を読んでも、こうした約束事をきちんと理解している学生とそうでない学生とでは、読み取ることのできる情報に大きな差が出てきます。

語学上達の秘訣は、どれだけ自学自習ができるかにあると思います。留学などでその言語しか使えない状態に置かれる、あるいは、教師がいつも付きっきりで勉強を見てくれる環境にあるなどの状況なら別ですが、ほとんどの生徒・学生の場合は、上達の決め手は「どれだけ自分で的確に学習ができるか」にかかっていると思います。

そして、「自分で的確に学習できる」ようになるには、学校の先生がいないときにも、ちゃんと自分の知りたいことを教えてくれる「先生」を確保しなければなりません。そんな時に「先生」になってくれるのが辞書なのではないでしょうか。

生徒・学生が自分で辞書を引いて学習できるようになれば、しめたものです。一度自分で思いのままに勉強を進められる「自立した学習者」になれば、その後の学力の伸びは大きく変わって行くことでしょう。

しかし、この「辞書先生」はなかなかの物知りですが、学校の先生ほど丁寧でもないですし、やさしく、その場の学習者のニーズに合わせては教えてはくれません（とはいえ、一昔前の「辞書先生」よりはずいぶん親切になりましたが…）。自分から「辞書先生」の教え方（使い方）を覚えて、その教えにたどり着かなくてはなりません。そのための辞書指導は大に行うべきだと思いますし、その効果は、すぐには表れないかもしれませんが、長い目で見れば絶大なものがあると考えています。

今回は高等学校の検定教科書、*Crown English Communication II* の本課について、授業の中で引かせるポイントを示してみました。発音や文型、成句の用法や語義の把握の仕方、辞書の約束事など、様々なことを生徒・学生に気付かせることができるのではないのでしょうか。

もちろん、短い授業の時間の間に、ここで挙げたすべての箇所を実際に確認させることは不可能でしょう。しかし、1回の授業で1か所でも2か所でもいいので、こうやって実際に辞書を引かせてみることを続けられれば、1年経った後の生徒の学力向上が大いに期待できると思います。

日々お忙しいなか、大変かとは思いますが、ぜひ授業でも辞書を活用してみてください。「自立した学習者の育成」のために、一緒にがんばってゆきましょう。